

# 設問の工夫



令和3年度中学校道徳教科書「新訂 新しい道徳」では、各教材の設問を2問に精選しています。「考えよう」と「自分を見つめよう」の2問で、前者を**中心発問**、後者を**一般化の発問**と位置づけています。中心発問は、教材文の中から内容項目に迫る部分を設問にしている、一般化の発問は、内容項目に関して自分に置き換えて深く考える設問にしています。中学生の発達段階を考えると、一般化の発問の内容には配慮が必要です。

まず、答えが決意表明になるような設問は避けるようにしています。たとえば、節度、節制の設問において「あなたは、これからの生活をどのように送り



## 中心発問

考えよう

野口さんはなぜ、地球は美しいと思ったのだろう。

## 一般化の発問

自分を  
見つめよう

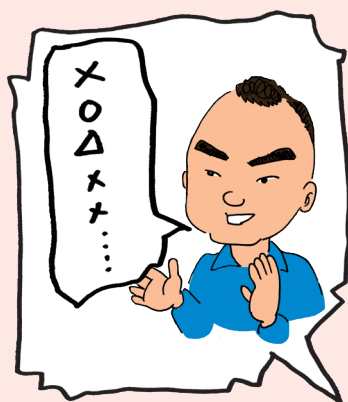
野口さんは実際に宇宙に行って、どのようなことを感じたのだろう。



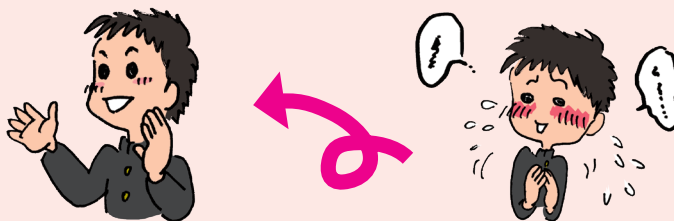
3年 p.70  
「ハッチを開けて、知らない世界へ」

たいですか。」という設問があったとします。これに対し、「早寝早起きをします。」「給食を残さず食べます。」などの発言を生徒がすると、その生徒は自分の発言にしばられることとなります。もし、遅刻をしたり、給食を残したりしたら、発言を聞いていた他の生徒から何を言われるか分かりません。また、道徳の評価は生徒の心の変容を見ることが求められていますが、性急に変容を求める設問は本末転倒だと思います。生徒一人一人のペースに合わせて考えられる設問を心がけています。

次に、自分のことを発言することが恥ずかしいという生徒も少なからずいると思います。小学生の頃は積極的に発言していた子も、中学生になると恥ずかしさを覚えて、消極的になる場合があります。そのような生徒でも発言しやすいように、教材文の登場人物の立場を借りて答えられるような設問を置くようにしています。これを「**着ぐるみを着せた設問**」と呼んでいます。



たとえば3年 p.66「ハッチを開けて、知らない世界へ」という教材の一般化の発問は、「野口さんは実際に宇宙に行って、どのようなことを感じたのだろう。」となっています。一般化の発問ですから、自分のこととして考えるわけですが、一見そうなってはいません。これは、この教材の登場人物である宇宙飛行士の野口聡一さんの立場を借りて、自分のことを発言させようという意図があるからです。



「新訂 新しい道徳」では、以上のような設問の配慮をしています。少しでも中学生に道徳を楽しく感じてもらえるように、これからも新しい教科書づくりに取り組んでまいります。